へ13
3938
1

S-13
3938
1

貞世操巻中

八
小
冊
号
函

安

抜きも〳〵男女の子ひそ八百萬の神
達の世界の法社弁群はまじん結ぶ
えんむすびの神〳〵高島震の尋と二人が操
出生地名所〳〵物置の巻の因詰
おぐるの以前夫婦〳〵美
喰あらそふ操者のえびす

やぐらに女ごしひあく帯屋のい玄門の巻
賞玉〻笛入の抄はの壺へ〻ひの迫いの右
を桂川ゆ流ま〻も皆ゆ〻〻縁ちゑ
き〻弁ゆ〻きひ一部冊るいゆるる人の
葉ふ稿けむ小三奎ゆねゆ一朝の玄潭
をゆ長〻〻〻繼〻〻ゆ書ゆ

ま〻書ゆ補ひて〻〻雷ゆ〻ゆ〻ひ
をまのゆ〻〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
加へ〻櫻ゆ弁書〻〻〻〻
文政拾四年辛卯孟陽

斯波の家臣
假名家金五郎
歌妓
小三
養老人龍水
倣舊年寫意
國貞画

小三金五郎假名文章娘節用前編上巻

江戸　曲山人補綴

あらまし

ちかいの大小石尊のさげ物ふ納まるべき長刀八ぢゆしのるふ展ふ
その名と止めるう。弓い矢場のあひさんぶ活業の助とたれる
辭けし河代のとふなん形波家の藩中ふ仮名屋文金ふ
足進とのへる者あり。二人の男ふたりけうぶ見の文ふ
男文武帯と慎ふ。両人とふ文武のたしなみてげこそ

勅めしぶ見文を恋いつゝふ奥づゝあの四側玉章さの俗
容貌さた女と人ゐまゝ奥づゝとあくゝゝひぶ月ふ日
ひふ見ひつのゝて。ゐのびゝの密結ふ玉章いつゝ長ゐゐ
懐妊の者ゐりたるふぞ世文今ふもあゝふ日ゐびとゝ日
浦ゐりぶゝとおりへ二人ひゐふゝゝふゐ夜館を
ゐびゝ生ゝゝゐゐゐと便ふて。雑波ゐゝゝのゐりて波
世界ゐゝゝひゝおりゝゝゝ日ゐ月ゐ日ゐ
ても要ゐたゝ。文より日ゐ船へふりゐ月ゐ日ゐ

ふゝ要ゐゐ船を侍て。学文規法の指南ゐふ月日ゐふ
ゐりしぶゐゝゐその校ふ勝ゐゝれべゝゐのゝゐふ弟ゐの
あゐゝ付て鼓昌ゐけゐ。ゐのゝゝ金銀の融通ゐけゐ
ぶ世ゝの金と人ふ貸ゐゝて。その利ゐゐて不足ゐゝ。ゐゝ
不ゐふ月満て妻いゐ子ゝゝゐのゝ元男ゐゐ長半けゐ
名ゐ金ふ弟ゐとゝびゐて。悔よゐ花よゐゐぞゐゐゐ。満ゐ
ゐ世のゐゝひ妻いゐ後花文ぬふふゐ人ふふゐゐ月ゐ引ゐゐ
療ゐゐゝ人ゐのゐゐの強ゐふゐ月ふゐゐ

ひと。冥途の旅をおもひたつ。そうふの妻を別れて今さらふの。ふ。こやること。このへどもらんとまさをうるけ
ども。江と野道の送りとすて。跡ねんごろをむこひろ。かりし
不どふ幼児と。乳母とかゝ養育させ
長金の弟と事の神の。五のてらふいとてこそ。光陰の過とかぞへ
ぬり。こふまさ孫救度所ふ。古徒賢の六弟とて夫婦かを
うふこひのあり。年ごろ。この法しるびふ是とふくるげ
さ。神仏ふいの。色。名この法仏のをどうけん。妻ハ今年ハ

十歳ふあまりんぐだ。ん女子と備けるが。夫婦のようとび
大ぐるこび。名さ人のふ人お稽と号ひのくことそぐろうち妻
いふこび。性別ふあり。次の年まさ女子をあ。ふこふ今
度い書生の悪ひ。悪ハ十のう人の年ふのを放ふのびぐ
血ひとろ人。猜猥せざる弟。悪血さ人もとりるん。あと後の
ちきりふぐり。そのうのをこの性ぐこれと。ひのつる是ふ書生
かのいびつひふ空ーくるりふけり。こふあのん六ふ法ひふ
と神や仏ふのり二人まをとまうけふ今さそひげけも

なく。妻いろと捨て亡夫の救ひ入る男の高恩ふかげくより
外ありしを。近所の者ふいさろ〜まさぐ広殿い元納めて
ものをまうるー 狗のうちふ。ものおりひつぐ〜まぐ食
さくしふ男の身一ツのぐ〜に二人のみをぐそぐんやうもあろ
つまーもあ。ひと鬼とも蛇とも。殺へるごろと捨ん今と云
ふまぐふくるーこん。一日〜とくーけり。さると仮名家文之
巫いつ又吹くものが身ふ引くぐ〜人の捨て逃げて。今ふ自
由ふくるに放遠方のみと狩ものぐ〜ひふけ人育て

ぐべ。その狩の手ものとこにかろ〜。ありやせんと人ぐ〜ふ。その
夫と云ひ入ぐ。狩猟とりーひうけ名をお亀とぐけまさ。
武許の金を六兵衛ふあり。娘をたぐ〜ものと情
ある深節ふ六兵衛いろ〜よろぐ。行き多ふ
く憑こと見てより後めぐまー。金をかく〜お稽古添てさる
又 夫婦黒ふつ区。あぐ元のきせとおく上りけりこ。ぐまさ吾妻
ある。仮名家が家ふ文之不義ふ。形出せーう
りの元 文字之進い怒ってうろ。ふく〜あ悔とも世間の

おりく上への使ひ。親の名を出し不孝の罪うち捨てもお
うとゝぶべき。豆腐の舂さを君へ進ず。文之丞と新吉の。少
文次郎ふ郎智と夫づり。嫁を迎へて是ふ要合せたる男の
隠居一名を白髪とおゝ。文次郎夫婦の中
ふ。一人の女児を儲けり是ふ名を文進と文之丞のと
ちうの。ふつ子ちうち業ど。おりひ出べくあのうふさうふ。
今の花洛ふ住るれ。男ふ持て不足ものうけと人の風俗。
業ドの物もやすもうん。ふくゝいふ文之丞が孫と。文二郎が孫

ふ要合せ夫と夫づゝ無さとづも縁をとゝふひおうけり

第一回

さるべ月日ふ実るるゝ文之丞が二ふ金ふ郎ハ今年十
七才お亀ハ十八の春ゝ。ありしが二人とも天性の美男美
女ふて華洛廣しゝの人どもふ。ひとうる容顔い稀と
楼の粉揚ゝ。ゝべおゝゝ。ゝまきぬ風情ゝり文之丞ハ
ごう吉郷とゝるの也遠き郷ふ世とあゝゝのうちふ二人と
ゝとまゝけ行ふ足るる文郎の。ゝ年ゝ

大福堂圖

こう藻こうの家をぬけまえて又のこころ人倫こう人。のこれぐいと
どのつうこうをおもて考る親の恩報じがたしとこちを
おりの月のくこう考へこんなとこびを家の程とやぶりつて妻を不
義した出奔せーこと。今のあの俗のかのひるびふこびを家
へ立ぬるこのあんとあくこと多と彼是ありひあいさてあど。
こあくこより金ゑ帝あ。又年ゑ武術と教へーふ。りとようこぶ
こ元こうまこの多。一と性人茅と考る。又武の才ふ長こと。
歌謡ゆあくこ上達こ。今ゑ金ゑ帝ゑ武士のたこうこず。

猪ふ和家連俳茶の湯掃茶花のこびひまで人ゑ多くこよう
ず
猪まこる。よこ元壮士こりこりふりこ。お毫ゆまこ世ふめづ
さ
茶門のこうまれあて文こうこ。ふこ。こ。こ。こ

隅の文之丞の弟のいとぐ〜ゝ家出して今の死活
あつ　ぐんぐ　ぶげい　しゝん
意ふ文学武芸の師範なり。不肖なるゝ〜ゝ人ふ孫
まで出来しと世ゝるがいとるるさ多ふ世ゝ主や為ねまじと
おりのとりゝ〜人づとふて文之丞ようこびゝとゝひ入りまぶ。
白鷺いうまつさひとゝうるゝねどのつゝん主君人勤高と
被為せ一分とあまるゝのゆるまるゝさればそのうゝ
貴尾とゝんつゝうひ君へわるひて出入とさせん。文通のゝゝ
ゝゝびゝ又孫の金太郎の罪なる分ゆるさいひふ分ふ

男ふあるゝまぶ。近ひとつゝうゝ引名のりゝい仮名家
の家名とお績さまるわどふ。ふ文とその人待べと。返ゝ
ふ委細とさとうふ文之丞いたひふうゝびこゞ分の出入い
かゆのひととも。將とが家へつゝいさとのうゝ人まるたゝうゝ
と金太郎と迎くまるゝ孫ゝのゝうゝいゝくゝうゝ月あゝ
び近ひのまるとまちん孫ゝ義へまるゝと生ゝ金太郎
い今ゝさゝふ。ふひげゝるゝ〜が家を継い分の郎まうトのひ
たゞ〜一人の親とのとゝおさ。そのうゝ人ゝどもの門ゝ上ゝ人ゝ

ぶひみ丈掃ぞと。猶ふあるのおかめ。ふまうるとんとのこころ
憂若いまぶ花いろいさるど。ゆうふこうあくそとゆるくうち
さけてみくうくねゆ中ゆるのとうち拾て。ゆくとあとさすう
まぶ。あがとそぶちの心みの。尚悲さるゆ理りるのお亀ゆ
このみ咲ーより。公細さの業ーどゆとあせんかくあとありん
うち。猶くくより金み弟を。迎へのの人の着ーぶ。今いこうるを
こうけうくと人月の関のこのびい泣ふぶの女みのたゆぶう
いとぶ猶ゆむそゆを。袖屋ふ庚月とを。まり夜引のがうも

昨くみぶのひまゆのくだうり。をうくく陳み川あけくの人を世ゆ
ゆる庚月のこを。扨くくゆる金み弟一おうゆけのみを
ぶうぶ。ゆりだり氣色ゆうるいのうトりふとゆふおうゆの月とゆるうり
あうこうりこひまうらとあゆ
「ハイいうくーのこを業ドますこうゆがそくん氣ゆふこのだいの
そ氏痛ゆいくーますト金み弟いこそくうくあくくを一ゆ
ゆけ。ゆ赤へゆのくゆ別をそゆくうのゆうくの。そをとんふくこの
ぶうくマアくーゆいこもかくゆもくくいゆ月でゆくうのふこ
をこをゆこうり引ぶつくいるゆのゆ

[illegible]

あるあつよう頭痛がするあるんで薬ぐすりもらうう「ハイあり
がとうございます。まんまう気ぐすりの長頭ぐおりくそるりま
せんく。今あなた実母様をのこしまして「そうう。あなたつま
ぬしをとりくるのくれんとうの病気が出るとうりいく。今日の
ちゆうで天気いよう。芝居でも行くうなどらいくくるこの
芝居もうんくこのごろうまん「ハテこまつあざ行くうんまだ
つぐのく国務ごの猪寛ごの国おん帝ぐんそが大ひやうだんた

そまこの東くくのがらくく来てある路考の門茅の路考助久
形代のまりくくと。弟子だくくこの人三弦の手があるのくん
くもまくこの形ごョ「さあうでございこのまますと子。アノのつぐあな
くこと出一所ぐ浪花へまりまくくこと。演芸居ぐうんまくく
評判のよい紀伊国屋いざうのくまくく子。「深之助ら今ハ
東都へ帰つくのまくく。評ぐんがよくくのく去年の表向所
の芝居ぐ苅萱の狂言ぐあるぐ。近年ぐおれく大あるくた
まくくうんぐの者りつづけぐ。所もやれも紀のくとぐさらちん

女子供が。初の孝行と上ずさまの浮判よ「
そのひいさの多い紀の間屋ゐも。まちうさお方がまさまあく
さうまこと〳〵。アアそんるでござりまをう「紀の国やようい男
といそりやアどこの人ざ「どこのおん人ゐは存じてありうぐ〳〵月
れとう〳〵やうえんまで。吉野やゐ紀の間屋と一ッゐあさとよりしい
ぐさりゆう 山 管見と学文のけいとゐお出るのさる。こるのさんが考ふめ。
さうのうんおわるさいます上「すんのうこさうもり解せるみ
「こさりませんゐ。あるのこさとあうこさゐ「すゐとのゐうと

おもうさ〳〵。おの〳〵ぐ顔の柄おゐ。うかげんゐおひるるあざ「
アレうんとうでござります上。そまざ〳〵私いちだいさらく ふ
ゐ。すいていうくゐるると葉ドます。絢ぶいつぷいゐるうます
上「すんのこうさゐあう〳〵くゐねへ。戯作ゐ考うざんぶゐんゐ
あんまり葉ドゐさんゐ。近ひと一処ゐあさゐ名孫くらく
こそゐくゐ。落ついさ〳〵早速ゐおめへとむひゐよとにさ〳〵
ちうこのうちぶ。ゐくゐゐ。ゐ。来ゐぶうゐ。親又がおめへ
あいこさぶ夫婦ゐまちるとゐみへの量見ゐ見ゐ是ど今までつのゐ

お親の目とゑのんごう。ゑまゆのことゆゑ大くゝとそだてゝ
の量こん一ッでもおのゝおをざうの。侍ごろ
るゝ縁づくせごうゐりとそなたのアア揚屋あれるもウ
東へ行くゝのやふるうこ門ぶんごろうのふあるあらゆゝ「ひく
うんのいやでござうませう。ぶゆゆのこだうう。さえごの
ゆうゆころうでもあるこぶ惟ごで私いうも
ろうござのまずぶ。あるこれ東へおゆ出あごけゝ。けづまの
女中い上人ゆでまこふ。ゑ乳ごとゆンまずふ。私の母ゆ

りのいとくもモウお拾ゑるこれゑまこうまずゆあくゝのゑく
考へまずこと寝ても夜の月もあひませば。その文実の文
さんいお新さえこんぬもうちふ三年流ふお果ゑさ見流ふ殊
こん姉さんひとり里ふ行くお出ゑのさまがいつごゆ見ゑ
岩あひ便ふゑのこうゑゝこうゝ。ゝこまこうと存ごま
こふそのかひゆゑの里親ふごゑさまゑ見と河所ふあまご
めるこうひとのこと四名今い枝ふゆくゝらふゆ力ふゆ
おゝこうさんごろう来と流ゝ。あのこふまゑおりひがけ ゑの

こんどのおつとうさまがそいねがるりまーさトいひつくるぶ
そんなのどんだ
金ばーりもそのこうさを「るんのとうさるみ。そんなふまのさまをさ
おりんやうつかなるのぶさ」
ドるるーこれがさぐるわどあそんふまをくうさまを婦さんふ
もまうとまとんとうがそのもまうとまぐぶ。人間い老ふふ
うえさざあるのぐ世のるーひ命だりい神仏のかづくふも
ぬのいうを実ままるの分の宿世それとよーこれふん
約ふもさぬとおやアねえう。又さとえうまーふ遠くへぐ
そ行がとんおめ人ふの赤をあづりでもさるとぜん解とうう

ねがるーねがさうりの階いさアだうさるぐ「そりやアモウ
あるぐあつちやーぐとも海よりとより四君の涙いおうう
さんのあつーるとをとそりーこうのだうまをんがらの表ぐだ
つまいそれきまず。さとえ妹の夜のおるーとうけをとも。あ
るとをのけん余の人ふ添まず。うのけだうまをんあるぐだ
東へおぐだりあそぐて問さるぐ伝もだうまをんとうさし
いそのとたいとそもまそいとうまをん。死ぬるぐでおだうり
ます「金馬麻るとをとひる。そをまいうんの線れとうふりの

死骸を人々の中に苦労をさせるなり。ひさごに涙をいと
おりくべとそらうつ。みな気をもむ。なやアれ。そんなようなりい
とらるべくさとーのうちに手拍子。便りとするのと活ん
ある。コレサあるあるぜそんなみな泣なるる。ばらるんぞのすう
みつとうとて一生まのぬとのかとなやアす。ちのと気をあり
りのちるなト「あるぐるそんなるみとうけん。
やさしくおのーやつくぐさるれど。程かのくなりまする
考へてこんをどこんますれど。ちきりみながそくなり。まして

あるぐるお宿みおせまるそださそうちのを死だるをのさく旅
まーるト「そおやへもマア出のようものるんぞと
りんと死ーと沢もあのその縁云マアよくりのとつりのそこんみ
こんををりんと年寄やくぐ今世の中ぐ静ぐーようけ是
昔の乱世のぐこんるるんぐ出のーの手うみちようつるみ者
でも武士の種ぐーー軍のさこうん是非出るけりとやアるー
ぬいとう出るぐ歌のうーとるるやーーとのちの貴とさこ清
ーーー

ゑびすよりはじめて今とくべつにまことの楽みこの世の中
そんな危い行くえもなく武士の身ほどたのもしけ
れども実の今の楽世界こそ。この理を考へるに三年や
五年遠ざかるとも昔おもかげのこゝろわどのこゝろねがはくは
自己修身で十分心ゆかぬ人情のおもかげ
さのそれぞれかなべたとの。
上様を出さるのあとにいつ後悔してもとまらねこゝろ
ゑびすを大きに拝ぶいよ〳〵こゝろ

はさる人見ねさるぶちようと入らるゝのまゝとりあの金
の弟ハヲイ〳〵とあるの新屋を出て中くゝ文文殿ハ一間の
うちゑ。煙草ゑ西ゝ〳〵文よりある。金の弟ハ先ゝあるゑ文の
側へゑ力こゝるヲ金ゝ有るゝ扱モウ流ゝ〳〵ゝ作るのゑ明日
るまで旅の調度を落ゝく用意さるゝよのぞや。そまゑ法
けてくゝ〳〵とのひさろまでまるゝ物ゑいつぶるの残
弟へ投其生をこんて安堵てまだるんと焼酎の雑る
夜の酒ゑ西ゝゑ弟ハ親の方ゝ戦でさ入そのゆゝるを。

文之丞

金五郎

況て人間の行さまふるまひなどは敬ふまでもなく。賤高貴借
伸とさだめ 稲刈源どる作ざまとうのかの今ドたすえ
やそちも十八なるまでが。妻ふドるれどのとかるのへが。かうのそのの
異のなるめるまど人るのしまより文武の百まさぐまさこのくだ
かるのがアぞのやうな人中へ出てもちんざまうくゆると
りんくものが智ふるとり藝ふ漫どて多くの人と服やふん
らぐくかるまぬぞや。又一ツ あの祖父さまと大ふるみがつまと
ふうりて考れしくまさ三ツ あの弟父弟の事父さのさ

もちろん方が為あらのだとあるまさ血まちの叔父母名ぞいぶん
とまふるそむぐんとまもまさ考れせやうまぬぞまち孫
くくの繁華のまち他の多人郭が都と遠ふくくよく風俗あと
あと仲男の付ふひそのあるまの陽罪ふとのくのつひまう
ねど物ふ万うちたふて花ふさそのまの月ふうくまん女
帝買なども三度ふ一度いまのさまとのみつまあアれがうのいさ
はうるぐく傾城傾国の傾ふまあまぐかるくだちくまう
ねやうのふとろとさぐくちやるくぬぞや考ふのと励まぐそめ

男の末のあうらねどころ不酒色に深り安さ知ずより
後將勇士も色不迷ひ酒に溺まて。大切の身をもろ〳〵子さ有
志のまて有ると世家の為の通りそれの例のあるとぶ
云の恥をのがれ狂ぶ者まぬとの通りそれの例のあるとぶ
義を命のうりとらひるぶ。安分別をふう狂と捨おとそ
の旦家出をしたまぶ一ぶうちの仮者もさぶあたようし
家を狂の男ぶの不孝をみるぶ。
とふ仕合と不自由ふく暑さ寒さの難

義もせぶ人るう〳〵ふ世をあるる。今とのくらしも浪〳〵の貧ぶ
者の者をこるるけもぶ不孝の罪ありやどの中ふ今さら
悔やもあ〳〵いかへぶ。サとの危狂とよく無へ元女色そのの
外あさとめい遠ざるぶうふるぶのの今度そちぶ
家へ入るるもぶ君へつるるとめいぶ。我男
のようとびとのうえ又お亀のちのさの時より。そちふのの
遠を繕つるぶ要合とそ夫婦ふ家うとあり人とい形さ
ごとも家へ入ぶ行ようとでそぶ〳〵狂でも成

素性はいとのひ弟のまもる人。やしの猪の妻あるまの猪ふ
別のあのさうづたとさせさとの人中でうの。そもを彼地へ
さう人まうのあの婿元とのあとを思づづつ直ちまうふ
このしとのをとのるけ見びかるるるんとまふ今の教訓
つまるとたるるるるねぞやトとせのまとまづくさまるの弟ふの。
ちどめまりと金弟つぶさふ学ん猪ふとまりがさ湖
とうろ見のるとぶ見ふうあん金一ぶんるとるとうんおふあ
さに教訓きうと貴分ふとうん。ありがうふどうまる。

ぶとうあうるるうとしるる見びどころのおびまるさけい
ちうううさ
ふ孝二ツとたびとまる。あるとまだのぶんお身のう金大
さの　ごさうるる
切ふに孝生るさ見おまとやうふおうしるるさまくぶさう
キトまるるるる文イヤを見ふかぐぐう。おうめもそもとあるド
さうふちひさふとくく若ふそぶちんぶ弟同猪ふくし
ううう。今うちるるも かるるうるうぶ見まる約束ふ
むんべう
分別の出ぬさうふ。ふくいとまどのるるるるト猪ふまる
ふもかとうけとたぶとまるれふ金弟い父のあと退

あのご新屋へ入り。翌日安之のことをのまどべ行くと彼らをを
見ると旅の準備を落ちるる。とのべ夕胸ををひやう
ごとつひるごるあるあの新屋へをつと来り「さうざお亀
ちうとの気色ぶをるるる」バイるんざうざうもあさだで
けや。やうぞり気痛ぶいるーもすアノあるとわざうぐもあ
の新おをあぞいをのやどざりまする人「さうさモウ迎ご
ををるるるるざうものをさるもるの人のさをまどざるるるおあ人
の新をるるのも今夜ぐりまるをもあるるんををあ。

能ぐんん能ぐおりんん本ごとひるごるる新をるんまど
おるのいをごるるげるかれをあるあ「まるそんな虚ざるる。
そををいるんの気やをあて四どざりまをる「さるさるるまあの
らのるるをいを虚をのるるるモウ明日るる居れ人のざるる。
るんをるるあるアるる人をるるぶ。さるんおるるさんるるるをるる
をを。おあ人も大ぶる使をるるるるるるるるるるるるるるるる
あるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

ものいふこゑもたどたどしくなりぬ。
「なんのまがのつゝい
るへ夢ふもそんなこゝろの抱まゝ。
業平さんがまゝ
ゝゝゝゝまゝりまゝゝまゝゝゝゝ
の垢ゝごもござりまゝん」「のゝかげんるゝとゝのゝこゝ
ゝゝゝ富士のゝゝゝゝ

若みかづらくも旅立と。今ぞ名残とて交らせ給ふ。
しんどべ
お門送まで。おろし出つ金ゐ帯の長つ人ゐるまでうんぶく
まべあるさまうえう人ゐ別はの泪ぞひゐ箱の愛也名残ふ
かくまて姿いつたえびたりぬ

ふさん
金帯 假名文章娘節用前編上終

揚太真遺傳

處女香

精製桐の箱入

一廻り 百二十文

そもく御所菓子の手練の男女ふ沼く氏新の魏とうるく
しそ生まと寿うそも安菓ごこれ極ふまもとこ孔目細ふるる地紙あり毛ハ
ゑく白粉の菓世間ふ方く白粉洗粉化粧水白油菓子成業しそ
はこことぐく新の菓ひてるちもしたとの地紙書ふ毛ゐ毛とおその書付の
皆分も地紙色張そ毛はしたと板表と地張ふ毛ゐ久しのめ仕ふ毛ゐ毛ゐ青海
ゑ申ハ生ゐ毛ゐ毛ゐ毛

色見甚美しく梅のごとく香り二月の頃咲初る義経の机因
相二重咲のごとく紅く淡くとろりのごとく。花びら。千ばかりて。極
の品。老木の枝おゝも添て咲そろひて咲盛て新と
淡ひとの玉梅寄花と付る梅なれば白梅と付る梅なれども白く白
月花素白の白くうるゝ紅梅よりも紅梅方いと赤不及事遠方
用もしそも用に立ぬ花なれども美く香る霧法の名品絶ひなく咲増し梅され
真の義人と可申べし

名水春水精制

愛の梅と称し
愛妾と云

妙薬 初みぬ玉

この玉梅と淡の梅と
あゝひとつもうつくしく香る
うつの方 代三十六文

書物兼繪入讀本所 江戸京橋弥左衛門町東側中程
文永堂 大嶋屋傳右衛門

国風ヲ忠臣顕雪玉
消滅シテ松ノ緑操ヲ存
シ小三金五郎ニ書ス
トシテ貞操ヲ尽ス時哀
豈別ノ婦ニ対ス